

## 龜井算攷第三篇

### 三上義夫

1。林鶴一博士の「和算研究集録」下巻、頁90—91に、「北陸道ノ和算家ニ就テ」の第一節として、百川正次の傳がある。私は「龜井算攷」及び同再篇に於て之を参照しなかつたので、茲に之を紹介して置く。

百川正次、忠兵衛トアリ又治兵衛トイハル。異説アリ。京師ノ人ナリトモ又大坂ノ人ナリトモイハル。ソノ著ハストコロノ新編諸算記三冊ハ又龜井諸算記ノ名アリ。寛永年間(1624—1644)ノ作ナリトモ、又正保年間(1644—1648)ノ作ナリトモイハル。明曆三年1657京都山田市兵衛板トシテ京都帝國大學ニ藏セラル。私藏スルトコロニ刊本中下二巻アリ。又新板ト冠シテ京都田中文内梓行トアルモノアリ。

石黒信由ノ算法書籍目録ニハ百川忠兵衛ノ書トシテ正保二年1645龜井算二巻アリ。又寛保ノ頃(1741—1744)浪花ノ人ニ百川一算トイヘル者アリ。算學ニ長ゼンガ罪ヲ幕府ニ得テ佐渡ニ流サレ途次越後ノ商人龜井某ニ速算ノ法ヲ傳フトイハル。ソノ算盤ノ運用ヲ龜井算又ハ九九引算トイフ、ソノ流派ヲ百川流トイフ。古流ノ一ツナリ。龜井算ガ特ニ新潟ニ於テ行ハルルハ現今ニ於テ事實ナリ。

龜井ノ代ハリニ瓶井、加目位等ト記サルルコトアリ。

磯村吉徳(奥州二本松ノ人、ソノ條参照)ノ門人村瀬義益(次記)ハ百川治兵衛ニモ從學ストイハル。

村瀬義益。所左衛門ト稱ス。佐渡ニ生レ百川治兵衛ニ學ビ、更ニ江戸ニ

出デ、奥州二本松藩士磯村吉徳ニ學ブ。延寶元年1673算法勿憚改ヲ著ハス。……………

2。林鶴一博士が百川正次若しくは龜井算に就いて説く所は、以上の外に出て居らぬ。記事頗る簡略であるし、又多くは出典が擧げてない。博士が諸算家の事蹟を記したのものには、史料の明記を避けたものが多いのは、極めて遺憾である。所説の眞偽當否如何も之れが爲めに判断し易からざる事となり、記述の價値を没却すること誠に少なくないのである。

寛保の頃に百川一算並に龜井某云々とあるのは、出典は示してないが、恐らく明治十二年新潟に於て刊行された高橋榮藏撰の龜井算の書中の記事に基づいたものであらう。直接に此書に據つたか、若しくは間接の引用であるかも、固より判然とはせぬ。併し北陸道の和算家を列叙した中にも高橋榮藏の姓名も録してないし、其著者も擧げてない所を見ると、何か據る所が有つたものと見える。

林博士は「新編諸算記」若しくは「龜井諸算記」と題する古算書に就いては之を知つて居た。博士が京都帝大所藏と言ふものは、私が河合十太郎博士から借覽したもの、或は同一の本であらう。河合博士は京都帝大教授であつた。其本には著者名は缺けて居る。

林博士が百川正次の著と云ふのも、恐くは本其物に記載があるのに據つたのではなく、前に私が記した如き出典に基づいて言はれて居るに過ぎないのであらう。其れは兎も角、百川が佐渡に關係あることは言つて居らぬ。

而も北陸道の和算家の中に入れてあるのは、百川一算なるものが寛保の頃に佐渡へ流されたと言ふ傳へに基づいたものと確定しても、恐らく大過はあるまい。

林博士は前に寛永正保頃の百川正次又は治兵衛の著書のあつたことを言ひ、後に寛保頃の百川一算を擧げ、其間に如何なる關係があるか無いかを

も説いて居ない。而も其兩者あるが爲めに百川正次をも北陸道の部に叙して居るのは、只、漫然と併記したに過ぎないやうに思はれる。

此の如き記述の態度は、歴史の考證を避け論究を放棄したものと云つて宜い。其れでは意味を成さない。苟くも歴史の事實を取扱ふ以上は、充分に闡明することを期して貰ひたい。識見の乏しい事を表明したものであると謂つても、固より當然である。

此問題は前に論究して置いたので、今は只林博士の記述の態度が當を得たものでないことを示して置けば足るのである。

3. 村瀬義益が佐渡の人であり、又數學を郷國に於て且つ江戸へ出て磯村吉徳に受けたことは、其著「算法勿憚攷」(又「算學淵底記」と云ふ)の序文に記して居る。即ち

野夫竹馬春風の頃より此術に志、生國佐州において百川の流を汲といへども、勘智淺にして算淵の底に不<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>至、ひたすら早算の所作他に勝ればやとのみ心かけ、朝暮進退除乘を事とせり。其以後武陽江府に有て磯村氏吉徳を師と頼、艱算の好示を請、愚勤の斧をといひ、算綾を縫べき針になさん事を思へり。……………

と見える。私の見た本には此序文に年記はないが、跋には「寛文十三登丑年如月中の十日、下總國葛飾郡世喜宿住、村瀬所左衛門尉義益」と記す。

此記載に依つて、村瀬は佐渡の人であり、少年の頃から百川流の早算など學んだことは極めて明らかである。けれども直接に百川治兵衛の教を受けたものであつたか何うかは、甚だ明らかでない。併し百川の流を汲むと言ふのは、百川其人から習つたと云ふよりも、其流派を學んだと云ふ事であり、直接の弟子ではなささうなやうにも思はれる。

然るに林博士が村瀬は百川治兵衛にも從學すと云はると言ふのは、何か典據があるのであらうか。此れも出典を示めてないので、正確な判斷は出來難いが、出典を知らないでは未だ俄かに信するに足らぬであらう。

けれども佐渡の人である村瀬が百川から直接又は間接に學んだと云ふので、百川を佐渡に因縁附けたものであらうか。京坂の人と稱せらるゝと知りながら、佐渡へ持つて行くのも、理由が必要であらう。併し實際に於て百川は佐渡に居たのであるから、結果に於ては不當はない。

4. 雑誌「算術教育」の四月號に於て、高橋榮藏撰の「算法龜井算」に載せられた龜井算の由來を、信憑すべき歴史の事實である如く説述されたものがある。

此種の傳説が幾たびも繰返されつゝ事實らしく語られるのは、甚だ悲しい事と云ふ外はない。全く困つたものである。

高木貞治博士の如きは、歴史は過去に於て實際に經過した事柄を叙述するのであるから、必ずしも難事ではないやうに説かれて居るが、史料の撰擇を誤り、其吟味を怠れば、直ちに不測の過誤に陥る。其れが滔々として、比々皆然りと云ふ有様である。況んや過去の出來事を必ずしも正確に説いた文献ばかり有るのではない。實際の通りに推定し得られるだけの證據が充分に残されて居ると云ふ譯でもない。従つて歴史の推定論述に爾かく容易なものではない筈である。

若し歴史は過去の事實を闡明すれば宜いのであるから容易なものだと云ふ論議が成立し得るものとするならば、數學其物の研究、數學の理法なり定理關係の創意にしたところで、論理の法則に従つて考へて組立てて行けば宜いだから、此れほど容易な事はない筈だとも言ひ得られる筈である。併し實際にはそんなに容易ではない。容易に大數學者が數多く輩出し得ないのは、其爲めである。歴史の正しい研究が一種の難事業なる事も、ちつとも事情に變りはない。

歴史の研究は私の見る所では、随分六ヶしい。歴史は容易なもの、簡単なものだと考へるやうな人があつたり、若くは極めて單純に取扱ふ人たちが相續いで跡を絶たぬ事は誠に悲しい。

5. 故遠藤利貞の數學史關係の史料集若くは隨筆とも謂ふべき「机前玉屑」四冊中の第二卷に、「龜井算教授法參觀之記」があるから、茲に之を抄出紹介することとする。言ふまでもなく遠藤は「大日本數學史」並に「増修日本數學史」の著者である。遠藤の此文は略して寫してあるので、今姑く其略した儘に擧げて置く。

新潟市ニ於テ龜井算ヲ教授スル者三家アリ。鈴木彌五右衛門、太田健太郎、長沼善吉是ナリ。是等ハ皆本業アリテ其餘暇ヲ以テ幼童徒弟ニ教授スルモノニシテ、幼童等モ亦算術ノ正科トシテハ小學校ニ於テ一般ニ歸除法ヲ學ブモノナレドモ、校外ノ別科トシテ龜井算ヲ修業スルモノナリ。故ニ先生等モ……各自宅ヲ以テ教場ニ充ルニ過ギズ。土俗之ヲ稱シテ算盤屋ト云フ。……月謝ハ目下十五錢或ハ二十錢ナリト云フ。

……長沼氏ハ夜學ナルヲ聞キ、佐藤莊松氏ノ紹介ニ依リ同氏ト同道シテ長沼氏ノ宅ニ行キ、龜井算ノ教授法ヲ參觀ス。……

新潟市古町通十番町長沼善吉私宅

生徒 概ネ商店ノ小僧丁稚ノ類

校主長沼善吉ノ本業ハ箱屋ナリ。晝間ハ箱ヲ製造シ、或ハ箱ヲ賣リ、夜間ニハ生徒ヲ集メテ龜井算法ヲ教授スルモノニシテ、伴一人アリ、助手トシテ共ニ教授ニ從事セリ。斯ク職人ニシテ此事ヲ爲スハ大ニ感ズベキ人物ト謂フベシ。其教場ニ充ツルハ八疊敷斗リノ一間ト外ニ三坪斗リノ一間アリテ、都合二間ナリキ。室内ノ上席ニ幅一間奥行一尺斗リノ床ノ間アリテ、其上方ニ百川流算術ト書シタル額ヲ掲ゲ、其左右ニせり算ニテ得タル相撲取組ノ姓名アリ。塗リ板ニシテ東西ニ分チ、果シテ大關、關脇等全ク相撲番附ヲ見ルガ如キモ、只二段目、三段目等ノ區別ヲ見ザリシナリ。……

(生徒ノ) 其速算ナルコト知ルベシ。生カ參觀ノ時ハ毎科ニ六人或ハハ

人ノ修業ヲ見ルニ、唯見詰ニ於テ唯一人ノ速算アリシノミ也。是レトテモ再考シテ正確ニ答ヘタリ。而シテ其年齡ヲ見レバ、大抵十五六以下、十歳以上ノモノナリ。是等ノ徒ハ皆晝間ニハ夫々ノ用務アリ、其餘暇ヲ以テ之ヲ學ビ斯ク迄速算ニ達シタリシハ、窃ニ驚クノ外ナシ。……

以上ノ如キ勉學ヲ以テ土地ノ風俗ヲ成セルガ故ニ、新潟市中ノ龜井算ハ實ニ日本邦内ニテ一ノ名物即チ一ノ專業ニシテ、其速算ノ法ニ至リテハ他ニ其比ヲ見ザル也。……

新潟ノ風俗ハ龜井算ヲ必須ノ學科トシテ之ヲ勉ムルコト此ノ如ク盛ナリ。故ニ之ヲ知ラザルハ人ト伍スルヲ耻ルニ至レリト云フ。小學兒童ハ學校ニ出テハ一般ニ行ハル、所ノ歸除法ヲ學ビ、家ニ入りテハ龜井算ヲ學ブモノトス。

是レ新潟市中ノ特色物也。若シ一歩タモ市外ニ出レバ則チ龜井算ヲ用フル者無キハ亦一奇ナラスヤ。此故ニ龜井算ハ實ニ日本邦内ニ於テ唯越後ノ新潟市ト佐渡一國ノ外之ヲ用フルモノ少シ。(長崎ニ似タルモノアレドモ、龜井算トシテ論スベカラズ)……

高橋榮藏氏ノ龜井算ノ首ニ龜井流算法ノ起源トシテ、記述アリテ頗ル詳ニ似タレドモ、恐クハ誤傳ナラン。……特ニ百川流ハ龜井算ナルコトノ記載アリテ、且ツ其由來モ頗ル詳ニシテ事實ニ似タレドモ、流祖百川治兵衛以來ノ事蹟ト甚ダ違フ所多シ。是等ノ事ヲ辨明シ且ツ研究スルノ必要ヲ認ムレドモ、本書ノ主要此ニ在ラザルヲ以テ之ヲ擱ク。

明治四十一年十二月。

6. 遠藤利貞が「机前玉屑」の書中に於て、新潟出張の際に龜井算教授の實際を參觀して記るして置いたのは、上述の如きものである。これは遠藤出張の明治四十一年頃の實際を物語る。随つて甚だ有益の記事と謂はざるを得ぬ。

此記事中には箱を作つて賣る職人長沼善吉が餘暇に龜井算を教授して居

た事を記るして居るが、こうした事情は恐らく古來同様ではなかつたかと思はれる。明治十二年に龜井算の書を作つた高橋榮藏にしても矢張り商家の人である。

龜井算が新潟市内にのみ盛んに行はれて、市外では全く行はれて居ないやうに記るされて居るが、此事情は何う云ふものであらうか。現今では何う云ふ状態になつて居るであらうか。古い時代にも新潟では龜井算が引續いて流行したのであつたらうが、其周辺の地方に於ては如何に擴まつて居たものであらうか。若し知られるならば知りたく思ふ。

若し此等の事情が明らかになると、百川一算と龜井津平の傳説に就いても發明する所が有りさうにも思はれる。

遠藤が右言ふ記述の中にも此傳説に就いて、恐らくは傳説ならん、流祖百川治兵衛以來の事蹟と甚だ違ふ所多しと説いて居るのは、固より首肯するに足る。林鶴一博士が單に其傳説の略記を併述したのみで意見をも附して居ないものに比すれば遙かに増しである。

遠藤は十露盤の運用にも相當に達した人であつたが、此の遠藤が新潟の龜井算の速算を稱揚してゐるのは注意に値する。尤も遠藤は紀州和歌山に出張したとき、故山東榮藏に逢つて、速算の技を角し山東の速算には及ばずして、山東の爲めに信用を失つた事がある。私は其後山東翁に會つたが、私は固より速算など云ふ事は試みた事もないし全くの素人であるから豫め其事を語り、翁も之を諒とせられて、其後翁の永眠に至るまで親交を續づけた、遠藤翁は達算を誇つてすっかり縮じつたのである。

遠藤が新潟での記事は、尙佐藤莊松氏の人物などに就いても記るしたものがあつたやうに記憶するけれども、手許に無いので今は省いて置く。

龜井算に就いては尙説くべきものがあるが、本篇に於ては茲に筆を擱く。

昭和十三年四月二十五日

## 川村貫治先生

### 縦横談

#### 珠算教育者の態度について

最近、珠算教育者の態度について、少し反省すべきではないかと思はれる節々を多く見受ける。私がいつもいふ研究的態度謙讓なる精神が、特に缺けてやしないかと思はれる。これからの日本の珠算を背負つて立ち、より發展させようといふ大使命を持つ青年珠算教育者としてはづかしからぬ態度を以て進んで貰ひたいと思ふ。文檢にでも合格すると、すでに大家になつたつもりで、文檢問題を批評する如きは以ての外である。恩師を恩師とせず先輩を先輩と考へず皆同僚の積りになつて仕舞ふ。今日のラヂオで松村介石先生の修養講座に「教を受けてゐるときは先生、卒業してしまふと誰々さんとなり、終いには誰々君と言ふ状態」云々の話があつたが、研究も怠り、徒らに他を批判する如き態度を往々にして耳にするのはなげかはしい。これからの珠算は生やさしいことでは發展しない。お互があくまで謙讓的に、他の非にばかり眼を注ぎ他の悪口にばかり氣をとられることなく、眞摯に研究しようといふ態度であつてほしい。中には研究的態度の人もあるが、あつてもそれを功利的にのみ考へてゐる向がある。珠算の奥義を極めたいといふ純な考へ方が、年毎に少くなつてきてゐる。

珠算書に例をとつてみても、新しい研究といふものは殆んどみられない。他の本のむしなほしか、糊と鉄で作りあげたものばかりで昔の研究より一步も出てない。新興發潮の氣横溢する現在日本の珠算教育者がかような態度を以て、その日、その日を過してゐるといふことは珠算界の爲にとらない。茲は一番珠算教員奮起の秋！ 古人の教へ傳へた珠算をよりよきものとして次代へのこさねばならない。皆でこぞつてそれだけの働きをしようではないか、小學校關係、商業學校關係、私塾關係その何れを問はず感情に走ることなく、結びあつてゆきたい。(文責在記者)

